



文・小原由美
絵・小島加奈子

朝から降り続いてきた雪が、知らぬ間にやんでいました。庭の楓の枯れ枝に積もった粉雪が細やかな風に揺られ、サラサラと震えるように音を立てています。

「もしもし？」

スグリさんが答えると、電話はプツリと切れました。

「間違い電話かしら」

スグリさんは、ちょっと寂しそうにつぶやきました。

空には凍星が輝き、いつにもまして静かな夜でした。

チリーンチリーン

チリーンチリーン

部屋の暖炉が赤金色に燃え、その前でうたたねをしていたスグリさんは、ハツとしてあたりを見回しました。食卓に置きっぱなしになっていた携帯電話が鳴っています。（こんな着信音じゃなかったはずだけど……）

スグリさんは不思議に思いながらも、鳴り続ける携帯電話に出ました。

「もしもし……」

か細い女の子の声がしました。

「もしもし？」

スグリさんが答えると、電話はプツリと切れました。

「間違い電話かしら」

スグリさんは、ちょっと寂しそうにつぶやきました。

スグリさんは一人暮らしのおばあさんです。七年前に旦那さんに先立たれてからは、都会で暮らしている娘夫婦が仕送りしてくれています。でもこんな雪深い森の中の一軒家にはなかなか遊びにきてはくれません。それにスグリさんは足も悪いので、あまり外出もできません。誰とも話をしないで一日が過ぎてしまうことはたびたびでした。

チリーンチリーン

チリーンチリーン

チリーンチリーン
チリーンチリーン

翌朝、また携帯電話が鳴りました。

「もしもし……」

昨夜の女の子の声でした。「もしもし。どちらさまですか？」
電話を切りたくなくて、スグリさんは話を続けました。「ミヤです」
女の子は昨夜よりも力のないかすれた声で答えると、電話は切れました。

その日の夜になって、また電話が鳴りました。「もし……もし」
ミヤちゃんの声でした。スグリさんは誰かと話ができるのがうれしくて、そのまま話を続けました。「ミヤちゃんね。切らないでね」
間違い電話とわかっていま

ミヤちゃん

（えっ？）
電話口から聞き覚えのある、ささやかな音色が聞こえてきます。
スグリさんは携帯電話を置くと、足が痛いのも忘れて裏庭へ駆け出しました。積もっている雪に足をとられて転びそうになりながら、庭時計のそばまで歩いていきました。庭時計から、ちょうど時間を知らせる優しいバイオリンの音色が聞こえてきました。楽器を作る職人をしていた旦那さんが、若い頃に作ってくれた木の庭時計。お知らせのメロディーはスグリさんの弾くバイオリンの音色を録音したものでした。

ミヤア ミヤア
雪と同じ銀白色で柔らかい毛並みの子猫が、段ボール箱の中で体を丸めて弱々しい声で鳴きました。
「寒かったでしょう」
スグリさんは震える腕で子猫を抱き上げ、急いで肩にかけていたストールで包みま



「あらっ？」
スグリさんは楓の木の根元にダンボール箱が置いてあるのを見つけました。

小原由美 1969年、名古屋市生まれ。保育士を経て児童文学作家に代表作に『ありがとうの道』（PHP研究所）『キユンすけのおくりもの』（三恵社）がある。

小島加奈子 1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と寄り添い暮らす。